

六 明來闍去、闍去明來

支那禪宗の一派たる雲門宗の大徳に、徳山宣鑑和尚と云ふがあります。初め教相家に於て、仲々教理に明るく、不平満々たる勝他の心を持つて、禪宗の盛な南方へ行脚し、教外別傳不立文字など云ふ、無鐵砲な宗旨を打ち毀してやらうと、勢ひすさまじく南方へ來つて。「澧洲の路上に到るに及んで、婆子に點心を買はんと問ふ」。澧洲と云ふ處まで來た時に、路傍に婆さんの腰掛茶屋があつたから、一ふくしやうと、その團子は幾らだいとやつた。處が婆さん、團子の値を云ふどころか、「大徳車子の内是甚麻の文字ぞ」。大徳の笈(軍子)の中にあるのは何の本かいと、とんでもない事を聞き出した。これが婆さんに解るものか。勿體なくも金剛經の疏鈔であるぞ。フン金剛經かいそれなら其のお經に『過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得』とありますが、大徳の點心しやうと云ふ心は、その中のどの心であります。過去心か未來心か、それとも現在心か、それが承はりたい。さもなくば餅は賣られませぬときた。徳山腹が減つて仕方がないけれど、現在心と云へば一刹那で過去心とは云へず、未來心とは尙云へず、ギツクリ詰まつて、口は匾擔に似たり。擔棒(匾擔)のやうに強張つてしまつた。

併し徳山は、この一問に答が出來なくとも、それですごく逃げ出すやうな卑屈漢ではない。自らはグウの音も上がらないながらに、こんな酷い婆々が居る位だから、屹度この邊に大善知識が居るに相違ないと目星をつけた。「近處、甚麼の宗師かある」。近所に誰か名師が居られるか。五六里行くと、龍潭和尚と云ふ大徳がある。そこへ行かつしやれと、婆さん木で鼻汁をくつたやうな挨拶。如來引接の深意は、炳としてこの婆さんの上に顯はれて居る。佛心は昭々として輝いて居る。宿業は正に到來して「未だ肯て婆子の句

下に死却せず、遂に婆子に問ふ。近處、甚麼の宗師か有ると」世相の底、人生の裡に、佛光を徹見せんとする處、眞に値千金。

乃で徳山は龍潭の處へ尋ね行つて、玄關前で大音聲に呼ばつた。「久しく龍潭と云ふ名が天下に響き亘つて居るが、音に聞く程深い潭もない、龍潭は何處に居るか」とばかり乗込んだ。時恰も玄關の衝立の後で、すつくり聞いて居た龍潭、すつと出て来て「汝久しく龍潭に見えたり、深い池の底まで届いたぞ、貴様は話せる奴だ、上れ」とあつて、師弟の約を結んだのであります。

徳山、一日和尚に參禪して夜も更けました處に、「最早後くなつたから歸れ」との言葉。徳山暇を告げて歸らうとして、簾を掲ぐれば外が闇い。「和尚眞闇ですよ」と引込む。「そんならこれでも持つて行け」と紙燭を點して渡す。受取らうと手を差出す途端。和尚フツと火を吹き消して仕舞つた。その刹那忽然として徳山は大悟の境に達したのです。あゝ眞に、明來闇去、闇去明來と云ふべきか。暗いと自覺した刹那、パツと光る光は、無限の輝である。

「無礙光如來の名號と、かの光明智相とは、無明長夜の闇を破し、衆生の志願をみてたまふ」『和讃』似通ふた邊があるのではなからうか。